

「子ども社会レポート」への連載、最終稿です。

会のメンバーそれぞれの学会への思いです。

【ラウンドテーブル発表、その後】

（児童保護者）

学会（30回、31回）に参加し「学童期児童の保護者への性教育アンケート①②」について発表し、包括的性教育について学んだことは、私自身が「家庭での性教育」を改めて見つめ直す大きなきっかけとなりました。

学会での学びを受けて、中学生と高校生の息子たちと性について話し合い、インタビューをして本音を聞いてみようと思いました。しかし、いざとなると「性」に関わる言葉を口にすること自体に、私自身に強い抵抗があることに気づきました。

その理由として、次のような点が浮かび上がりました。

- ・学校でどのような性教育が行われているかを知らない。
- ・自分自身が十分な性教育を受けてこなかった。
- ・息子という異性の子どもであることへの抵抗感。
- ・思春期特有の恥ずかしさ。
- ・「どこまで話すべきか」という迷い。

これらのことから、家庭での性教育の難しさは、単に「知識が足りない」だけでなく、これまでの価値観、そして親子の距離感が複雑に影響しているのではないかと思います。

夫に相談してみると、「学校や漫画で自然に学んでいるだろう」「恋愛にもあまり関心がなさそうだし、親子関係も悪くないから大丈夫」という返答でした。

このやり取りを通して、家庭の中で「性教育の必要性をどのように認識しているか」が一致していないと、実際の行動に移すことが難しくなることも実感しました。2024年に私たち、「心の教育・性教育・人間教育を考える会」が実施した、「学童期児童の保護者への性教育アンケート①」でも、「家庭でどのように性教育をしたらいいのかわからない」という声が多く寄せられていました。また、小倉・北川（2010）がまとめた“家庭で親が果たすべき役割”として、次の8つのカテゴリーが挙げられていました。【学校教育での性教育の内容を知る】【学校教育との連携をはかる】【性の相談に対応し、知恵を伝授する】【正しい性知識を伝える】【子どもの成長発達を受け止める】【親子の関係性を調整する】【性情報の氾濫に対応する】【夫婦関係を円満にする】

そして、子どもたち自身は「自分を理解してくれる」「抑圧しない」親であれば、性に関する相談や話題を受け止めてほしいと考えていることも示されていました。この研究結果を読み、私自身が経験した“不安”や“迷い”は、決して個人的なものではなく、家庭で性教育を考える多くの保護者に共通するものであることがわかりました。

学会への参加が、私自身にとって「家庭での性教育」を改めて見つめ直す大きなきっかけとなったと同時に、その難しさや戸惑いも実感しました。しかし、こうした経験を丁寧に振り返り、課題を共有していくことで、同じ悩みを持つ保護者の支えにもつながるのではないかと考えています。これからも、学校・家庭・地域が連携して、子どもたちが安心して成長できる環境づくりに向けて学びを続けていきたいと思っています。

引用文献

小倉由紀子・北川眞理子 (2010). 「家庭での性教育における親の果たすべき役割」『日本助産学会誌』 Vol.24.No.2.

(高等学校教員)

ラウンドテーブルに初めて参加させて頂いたのは十年前、第 22 回の学会でした。ラウンドテーブルは司会者かコーディネーターが学会員であれば、研究者でも学会員でもない私たちが、これまでの活動内容を発表し、皆さんに聞いていただけるという事は驚きでした。また今回、これまで継続して活動をしてきたことが、社会に役立っているのではと感じることが出来、大変嬉しく思いました。そして、第 31 回学会において「高等学校における性教育の実情と今後の課題」についての発表をさせて頂くことができました。発表するにあたっては、これまで自分が日々取り組んできたことを振り返り、また、改めてまとめることで未来の子ども達を大切に育てたい、という気持ちになりました。そのような機会を頂いたことにとても感謝しています。

現在の学校で包括的性教育を進めていくためには、地域や生徒・保護者、学校の状況など、それぞれ色々条件が異なり、タイミングもあり、簡単ではないこともあります。

その解決策として、今後、包括的性教育の活動を、社会全体に少しずつ、自然に染み込む様に広げることができればよいのではないかと考えるようになりました。そうすれば、学校だけでなく家庭でも、どのような場所でもみんなが当たり前、「大切な事だよ」と伝えることができるのではないかと考えています。そのように、社会全体が変わることで、未来の子供たちを育てる学校が変わり、生徒たちは自分の命の尊さを知り自分を大切にし、また、他人のことも大切にすることができるようになるのではないかと考えます。大人がしっかりとした人間性を備えて、子どもたちに接し、社会で良い見本として行動すること。それが、私たちが掲げる「心の教育・性教育・人間教育を考える」ことにつながっていくと信じ、これからも自分ができることから、できるところから努力し取り組みたいと思います。

(高等学校教員)

今回、第 31 回学会において「高校生の妊娠についての 1 考察」の事例発表を行いました。十数年前の事例当時のことを振り返ると、現在と違い相談機関や情報量、事例についても少ない時代でした。

また、性教育についても深く触れる機会がなく、教員自身も知識が少ない中で指導しなければいけない時代でした。現在は、包括的性教育という言葉が注目されるようになり、今後の教育には欠かせない教育内容になってきたと感じています。教育現場の一人として、多くの生徒に伝えられるように今後も取組

んでいきたいと考えています。

そこで、今後の参考として高校生自身は性教育についてどのような思いがあるのかについて、3 学年(男子)2 人に対面对話形式での質問を試みました。

若者の性について研究しているグループが、君たちの意見を参考にしたいと言われていて、いくつかの質問に協力してくれるかな？

A 君・B 君 良いよ。

中学校で性に関する勉強をしましたか？

A 君 中学校の保健の授業で学んだ。

B 君 俺も同じ。

どんな勉強をしましたか？

A 君 どんなことを学んだか覚えてない。

B 君 俺は、性病についてと避妊について学んだ。

A 君 特別授業か何か忘れたけれど外部の人にも教えてもらったことを覚えている。

B 君 俺も同じや。外部の人から学んだことを覚えている。

勉強の内容は役立ちましたか？

A 君 あまり覚えていないのでわからない。

B 君 避妊について知れたので良かった。

今後、どんなことを教えてもらいたいですか？

B 君 パートナーが出来た時に性についてどのように接していけばいいのかを教えてもらいたい。

性についていつ頃から興味を持ちましたか？

B 君 中学校の保健の授業がきっかけではなくて、中1で携帯電話を持った時に自分で興味をもち検索して知った。あと、携帯に流れてくる広告に出てくるので、そのようなサイトを見て知った。

A 君 インターネットから性に関することを知る機会が多かった。中1から家のパソコンで調べていた。

二人の話から、学校での性教育については興味、関心が低く、すでにインターネットを通して間違った知識を学んでいる現状があるようです。学校での性教育の授業内容についても、成長過程に即し生徒たちが興味関心を持てる内容が必要であると感じました。また、家庭でのインターネットなどの情報環境については、一定の制限が必要であり、間違った知識を学ぶ前に、幼少期からの性教育、学校だけでなく家庭での性教育の必要性も感じました。

今回は対象者(男子)が二人のみで、質問内容も限られたものでしたが、対面对話のほうが紙面やwebでのアンケート調査より本音を引き出せるように感じられた事は、今後の調査の参考となりました。

【学会に参加して、今思うこと】

（児童館元館長）

健全育成事業に関して 30 年余りになります。児童館では放課後留守家庭児事業を展開しています。私が関わった当初は、共働き家庭やひとり親家庭の児童が利用していました。40 人定員の 1 割も満たないひとり親家庭でしたが、年々ひとり親の家庭が多くなってきたように思います。

親の事情で、自分が置かれた状況を子どもなりに感じて突然泣き出す子や、暴力で不安定な自分を治めようとする子たちを何人も見てきました。子どもたちの涙をみる度に、ただ抱きしめるしかできない自分の無力さに情けない思いがありました。

そうした中で、子どもたちの現状を伝えたい、若い人たちに子どもを授かる親としての責任などをどうしたら伝えることができるのかと思う日々でしたが、同じ思いの仲間と出会え、共に学びあい知恵を出し合いました。研鑽を重ねて幼児期からの性教育の大切さを認識し、全国の幼稚園の保護者への「出生についての教育アンケート調査」を実施、保護者の意識を知ることから始め、保護者の悩みや思いに寄り添う『かけがえのない命』の冊子作成となりました。また冊子と同じサイズのクリアファイルに警視庁防犯標語「いかのおすし」のイラストを作成することになり、警視庁の許可を得ることが出来たのは、嬉しいことでした。

そして冊子を通じて多くの方々に「いのち」の大切さを、また学会に参加しエビデンスに基づく私たちの思いを示すことができました。こうした事はひとりではできないことです。仲間と繋がり、次代を担う子ども、若者に「いのち」の尊さを理解して欲しいという共有認識があったからこそできたことです。今後は、個々が学んだ事を自分なりの方法で身近な人に伝えていきたいと思っています。

（大学教員）

私は「心の教育・性教育・人間教育」に携わらせていただいて、10 年になります。それまでは、性教育や性に関する問題は少し遠い感覚だったように思います。また、性に関することは、個々の価値観が大きく影響する面があり、簡単に話題にし辛いと感じていました。

この活動でまず関わったのは、中学校・高等学校の養護教諭の実践と課題の調査でした。そこから包括的性教育の考え方が広まり始めていることに出会い、性に関する問題は、個人の幸せや社会の豊かさに繋がっていると強く思えるようになりました。性は生と密接にかかわっており、誰もが大切にしていきたいものです。近年思うのは、子どもの教育だけでなく、大人への教育の必要性です。大人は子どもの見本でもあり、子どもに対して強い立場に位置することが多いだけに、大人の捉え方と言動は、子どもの成長や社会の安定に直結していると思います。

人生 100 年時代です。大人も自身の残りの人生を豊かにそして互いに尊重しながら歩いていくためにも、生涯学習の一環として、地域などで性教育について広い視点の捉え方を学んだり、あるいは語り合い、自身を見つめなおすような場があっても良いのではないかと思います。

また、性の捉えは、個々の価値観により様々な面があるため、私たちは、何が正しくて、何が正しくないか、それを教育しようとするのではなく、今の社会において、どのようなあり方が幸せに結びつくのか、みなで考えていく過程が大事であり、そういった場がある面、教育になると思います。身体

的特徴や生育環境、志向や年代、時代、国、文化など様々な違いで、性の捉えと言動は異なってくると思います。

性をどのように捉え、大切にしていけることが私たちの幸せになるのか、様々な立場の人がその思いをメッセージとして伝え合い、模索していくことも、今の時代を未来につなげ、生と性を考える教育活動になるのではないかと思います。ごく僅かなかかわりしかできていませんが、そのような活動を、今の仕事の立場も活かしてできるようにと思っています。

【これから】

ラウンドテーブルという、学会の開かれた一場面において研究発表をさせて頂いたことは学びであり実践活動でもありました。10年前は「性教育を考える会」の名称でしたが、ラウンドテーブルでの研究発表を重ね、私たちの思い、性教育は心の教育であり人間教育であるという確信を得ることが出来、「心の教育・性教育・人間教育を考える会」となりました。

医療・福祉・教育等の専門・実務職に、主婦、児童保護者等と年代、環境も様々な女性たちが全国から集り「いのち」の尊さ「心が生まれる性教育」を、どのように社会に伝えていけるのか、伝えればよいかについて試行錯誤しながら研鑽を積み今日になります。

研究発表では、内容が主観的になっていないか自己満足に陥っていないか、エビデンスを基に客観的に論じられているかの検討が、大きな課題であり学びでした。この点に関して長年コーディネーターを努めて頂いております山田富秋先生（社会理論・動態研究所）にご指導頂きましたことを、心より感謝いたしております。

初めて学会に参加した、調査等の手助けをしてくれているサポーターは他の自由研究発表も傾聴して、子ども社会についての様々な研究に知的刺激を受け、そうした研究が実践に結び付き社会に役立つ事を期待したいと話してくれました。それは、子ども社会学会に縁を頂いた私たちの願いでもあり、私たちの目指すところでもあります。

性は生きる基盤であり、人間としての存在、また生涯に関わる大事な事柄です。子どもたちが人間として生まれた事を誇りに思い、いのちの尊厳を大事に考える「性教育」の輪と和のひろがりをお願い、これからも子ども社会に目を向けてまいります。

今回、「子ども社会レポート」に連載執筆の機会を頂き、声を掛けて頂いた加藤理前会長、引きついで頂いた多賀太会長に御礼申し上げます。



出典：「心の教育性教育人間教育を考える会」作成 警視庁防犯標語「いかのおすし」承認イラスト

「心の教育・性教育・人間教育を考える会」一同